

HUGE

hi-end style magazine.

【ヒュージ】
No.034
MAY 2007
5
KODANSHA
定価
680YEN

平成19年5月1日発行(年10回)1日発行(第5巻第4号)



GODSPEED

OUTSIDERS
うまくやれよ、不良ども。

You

"There he goes.
One of God's own prototypes.
Some kind of high powered
mutant never even considered
for mass production.
Too weird to live,
and too rare to die."

Hunter S. Thompson

"GONZO"



Text/Kunichi Nomura
Edit/Hiroshi Kagiyama (EATer)

1950年代から自殺する2005年まで、
己のジャーナリズムやスタイルを貫き通し、
権力や暴力といった逆風の中でも
吠え続けたアウトサイダー・ジャーナリスト。
その名もハンター・S・トンプソン。
彼の超主観的な写真や言葉には、
"GONZO" (= 異様、イカれた) という愛称に相応しい
武骨な生き様が宿っている。

「ヤツが行くぜ、神が作り得た真の試作品。大量生産にゃありえない強烈な突然変異。
生きるには変わり過ぎ、死ぬには珍重過ぎる」(ハンター・S・トンプソン)

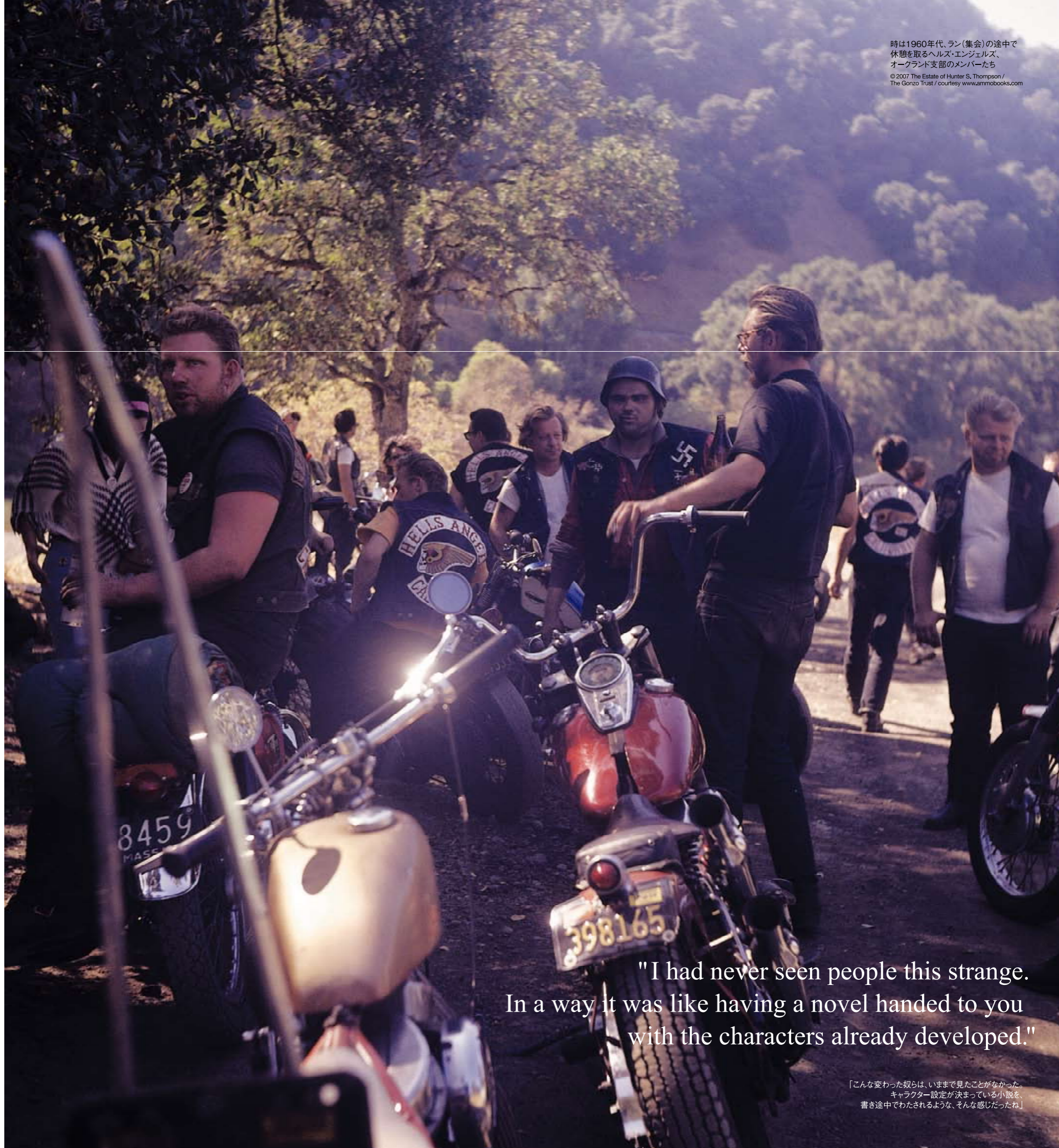
アメリカ国境近くにあるメキシコの歓楽街、
ティファナに向かうロードトリップ中にて、
ハンターのセルフポートレート
©2006 The Estate of Hunter S. Thompson /
The Gonzo Trust / courtesy ammobooks.com and M+B

ヘルズ・エンジェルのオークランド支部のヘッド、ソニー・バージャー(写真上段の左)と、オークランド支部一の暴れん坊であり、パーティアニマルであったテリー・ザ・ランプ(写真上段の中)。テリーは映画『爆走! ヘルズ・エンジェルズ』への出演や、ハンターの本でソニーに次ぐ知名度を誇った。また長髪にライダーズというバイクスタイルのファッションを生み出した張本人であり、ソニーも「最もエンジェルズらしいエンジェル」と語っている。68年、ドラッグによるオーバードーズか、または喧嘩の果てなのか不明のまま、一人死んでいるのが発見された

© 2007 The Estate of Hunter S. Thompson / The Gonzo Trust / courtesy www.ammobooks.com

時は1960年代、ラン(集会)の途中で休憩を取るヘルズ・エンジェルズ、オークランド支部のメンバーたち

© 2007 The Estate of Hunter S. Thompson / The Gonzo Trust / courtesy www.ammobooks.com



"I had never seen people this strange. In a way it was like having a novel handed to you with the characters already developed."

「こんな変わった奴らは、いままで見たことがなかった。キャラクター設定が決まっている小説を、書き途中でわたされるような、そんな感じだったね」

"GONZO"
Hunter S. Thompson



"This is the way life goes in Big Sur :
 waiting for the mail,
 watching the sea-lions in the surf or
 the freighters on the horizon,
 sitting in the tubs at Hot Springs,
 once in a while a bit of drink—and,
 most of the time,
 working at whatever it is that
 you came here to work on,
 whether it be painting, writing,
 gardening or the simple art of
 living your own life."

「ビッグ・サーでの生活はざっと次のようになる。
 郵便を待つ。浜辺のアシカや、
 水平線に浮かぶ貨物船を眺める。
 温泉につかる。時には、少し酒を飲んだりもする。
 そしてほとんどの時間は絵を描いたり、
 文章をしたためたり、庭いじりしたりと、
 そして自分の人生を気ままに生きたりと、
 各自ここに来てやるはずだったことをするんだ」

サンフランシスコからロスへと海岸線を走るハイウェイ1を、
 車で約2時間程走った場所にあるビッグ・サー。
 この小さな街はビートニック、ヒッピーの聖地として知られる
 © 2007 The Estate of Hunter S. Thompson /
 The Gonzo Trust / courtesy www.ammobooks.com



"GONZO"
 Hunter S. Thompson

袖をカットオフしたエンジェルのメンバーは、
 約四半世紀前の風景とは思えないほど、今見てもクールで新鮮
 © 2006 The Estate of Hunter S. Thompson /
 The Gonzo Trust / courtesy of ammobooks.com and M+B



"Monday I'll ride my thumb south-Carmel, Monterey, Big Sur, and maybe all the way to Los Angeles. Whatever happens will be all right. I do not care and have no plans. All want to do is get out on the coast and see the California everybody talks about. I'll go as far as the rides take me, sleep on the beach(sleeping bag), and beg, if necessary, for food."

「月曜に、俺はヒッチハイクで南へ下る。カーメルでもモンタレイでもビッグ・サーでも、ロスまで行っちゃってもいい。何が起ってもうまくいくさ。何の心配も、何のプランもない。海岸線に出て、話題のカリフォルニアってやつを見られればいいのさ。行けるだけの距離をできるだけ稼いで、海岸で寝袋で眠る。必要ならば、飯のために物乞いだってするさ」

ティファナのシーサイドで銃を弄ぶ男たちの姿
© 2007 The Estate of Hunter S. Thompson / The Gonzo Trust / courtesy www.ammobooks.com



ビッグ・サーで撮影した、当時トンプソンの妻であったサンディと愛犬のアガー
© 2007 The Estate of Hunter S. Thompson / The Gonzo Trust / courtesy www.ammobooks.com

"GONZO"
Hunter S. Thompson

ハンター・S・トンプソン、アウトサイダー！ ジャーナリストの生き様

昨年の12月、数々の優れた写真集を出版するアメリカのAMMOBOOKSから7冊の本が出版された。ブルーのボックスに収められたその本のタイトルはただ二言「GONZO」。愛情と尊敬をたっぷり込めた序文を寄せるのは今をときめくジョー・デップ。誰が撮った写真なのか知らない者でも、ページをめくればこの本に収録された写真がいかにパワフルで、スタイリッシュで、孤独で、そして惹かれずにはいられないものであるか理解できるに違いない。そこにあるのは、50年代のアメリカを一人ヒッチハイクで旅する絵に描いたような男の姿。あるいは60年代初頭のグリニッジ・ヴィレッジの喧嘩が垣間見られるモノクロの写真。そしてウィリアム・エグルストンの写真かと思えるほどのニュー・カラーな色彩で、ピート・ニクの聖地ビッグサーの崖の上でタイプライターに向かうジャーナリストの姿。そして60年代オクラホダ、シスコを中心に全米を震撼させたモーターサイクルクラブ界の帝王、ヘルズ・エンジェルズ注1)の見たこともないような当時のカラー写真。そこには若きリーダー、ソニー・バージャー注2)も「爆走！ヘルズ・エンジェルズ」への出演でカルト的な人気を博したテリー・ザ・トランプの姿も見える。それは彼らがまるで自分のすぐ隣でハーレーのエンジンに火を入れることが感じられるような、リアルなアウトサイダーたちのポートレート。

あるいは保安官選挙に立候補したスキンヘッドに拳銃の異様な出で立ち、70年代のラスベガスで行われた全米反麻薬キャンペーンの数々のフライヤーのコピーと「緒」に写る、アロハシヤツにレイバーのサングラスをかけた目をしたポートレート。コロラドの雪の上でタイプライター目がけて銃を乱射する中年親父。この写真集の主人公は、50年代から2005年に自分の頭をショットガンで吹き飛ばして死ぬまで、アメリカという巨大な国で己のスタイルを貫き通し、権力や気に食わない相手

に、自分がボコボコにされようが叩きのめされようが吠え続けることをやめなかった人のアウトサイダー。その男が振り続けた時代時代での自身の姿と、噛みつく相手、そしてその両者を内に混在させたアメリカという国の荒涼とした愛すべきランドスケープ。帽子を常に目深に被り、口元にはくわえタバコ、片手には酒。死ぬまで愛用したタイプライターとその隣には相棒の拳銃。意識が飛ぶほどクスリを摂り、ゲロを吐くまで酒を飲み、自分の人生を自分で書いたシナリオ通りに生きたチンピラジャーナリスト。それがこの写真集の主人公でありフォトグラフィアーでもあった男、ドクター・ハンター・S・トンプソン。

超主観で切り込む 唯一無二のジャーナリズム

元々の意味は「ザール」異様、イカれた、であるこの「ゴンゾ」という言葉は、ハンターのために生み出されたといえる。ハンターの生き方そのものがゴンゾであり、書くものすべてがゴンゾだった。ゴンゾとは何か？通常、それは「ゴンゾ・ジャーナリズム」として使われることが多いが、何もルボだけではなく、あらゆる表現方法に当てはまる1つのスタイルであり、書き手や取材者が取材対象を消極的に、客観的な傍観者として公正な目でものを見ようとするより、積極的に、むしろ大いに近づき、主観バリバリの当事者として関与していくというもの。そうすることにより、物事の本質がより見えてくるというそのスタイルは嘘も方便、現実虚構も大いにありの一人称。サクサクとその主題に切り込んでいきつてもメタメタにされる姿は、ドンキホーテのように痛快で、チンピラだ。ならず者ジャーナリズムともいえるこのゴンゾを生み出したのがハンターなのだ。

ハンターは1937年にアメリカの南部であるケンタッキー州のルイスビルで生まれた。高校を卒業後空軍に入ったハンターはここで将校用の新聞に記事を書くことでジャーナリズムの世界に足を踏み入れた。とはいえ規

則を守るはずもなく、地元他紙に勝手に寄稿したり、その生意気で反抗的な態度が原因で早期除隊となる。規則に縛られた集団生活がハンターの性分に合うわけもなく、後に「海の掃除人、バリのアル中、イタリアのヒモ、デンマークの女狂い。なりたきやなればいい。ただ空軍だけは近寄るな」と言っている。その後ニューヨークに移ったハンターはタイム社にコピー係として採用されるが、態度が悪くすぐ首になる。さらにいくつかの仕事をしては首になった後、ハンターはフェルトリコのサン・ホアンへと向かう。当地のスポーツ誌で働くためだったが、到着後すぐにその雑誌が廃刊になってしまふ。しかしここでハンターは、中南米を旅しながらフリーランスとして様々な媒体に寄稿する機会を持つることになった。この時期にプロットヒッピーが溜まる当時のフェルトリコでの酒と放蕩の日々が、ゴンゾーとしてのハンターを形作る。当時のことを書いた処女作ともいえる小説「ラム・ダイアリー」はジョー・デップ主演で映画化されることになっている。

そしてアメリカに戻ったハンターは、ジャック・ケルアックの著作のタイトルにもなっているピート・ニクの聖地、ビッグサーに移り住み、そこでのアーティストやボヘミアンたちの暮らしについて、初めて大きな記事を雑誌向けに書く。それからのハンターは猟銃自殺したアーネスト・ヘミングウェイの自殺の真相を探る取材(後のハンターに奇妙に繋がる)をしたりしながら暮らしていたが、やがてサンフランシスコへと移り住むことになる。

当時のサンフランシスコはまさにヒッピーカルチャーが花開く寸前の世界で、最もワイルドで刺激的な街だった。ハンターはやがてそこでアンダーグラウンドカルチャーとドラッグにどっぷり浸っていき。愛と自由と暴力と薬。誰もが新しい価値観や思想を求めあらゆる表現活動やライフスタイルを作り上げていた。ケンキージーとその仲間のメリー・ブランクスターズたちがバスで全米を横断し、シスコでアシッドテストと称するイベントでLSDをまき散らし、意識の変容を求めて

いた時代。ジャンヌ・ジヨプリンやグレイトル・デッドがローカルバンドとして新しいロックを創造しようとしてライヴハウスを日夜揺らしていた時代。道には全米中から集まった若者たちが、新しい時代の波に興奮し酔いしれていた時代。ドラッグは既存の価値観から新たな道を示してくれる道具であり(もちろん違う使い方の者もたくさんいた)、フリーラブが叫ばれ相手を探すが比較的容易、というか極めてカジュアルな時代だった。ハンターもまたその一人だった。そしてそこで出会った集団のことを書いた記事が彼の名を二気に知らしめることになった。

ヘルズ・エンジェルズに命懸けの潜入取材

第二次大戦後の退役パイロットが最初に組織したとされるモーターサイクルクラブ。爆撃機についていた愛称から取られたその名前は「ヘルズ・エンジェルズ」。デスヘッドと呼ばれる翼の生えたドクロを描いたパッチを持つ同名のクラブが、偶然にもカリフォルニア中にくつつが存在し、彼らにはやがて同じクラブとして同盟を結ぶこととなった。その中でも特に有名であり、ヘルズ・エンジェルズの全米進出の中心となったのが、シスコの隣町オクラホダに存在したオクラホダ支部。カリスマ的なリーダーとしてソニー・バージャーを擁するオクラホダ支部には、カリフォルニア中から名うての若く、ワイルドなバイカーが集まり、後に「リスコスタイル」と呼ばれるようになるチヨップしたハーレーに股がり、勝手気ままな暮らしを送っていた。好きな時に走り、飲み、犯る。当時というより、現代のモラルともまったく当てはまらない、自身たちのみの法の下で生きる彼らと知り合うことに成功したハンターは、最初の出会いについてこう語っている。

「ニューヨークから文学誌で執筆する堅気のライターが、シスコ南部の工業地帯にある辺鄙な工場まで自分たちを探し求めてやってきたってことに奴らは最初面食らっていた。

最初こそそんなだったが50〜60杯のビールを飲んだ後に、互いの共通点を見出した。狂気を持つ者同士っていうのは、すぐに見分けがつくってものなんだろ。」

メンバーとともに暮らし、ランと呼ばれる集會に参加することにより、ジャーナリストというより、メンバーそのものという暮らしを送る。そこには善悪もなく取材対象にギリギリまで近づき、というより、対象に自身自身がなるといふ「ゴンゾ・ジャーナリズム」の真骨頂が見て取れる。内に狂気を秘めた両者の仲睦まじい新婚生活は、当然長続きするはずもなく、書いた本で儲けることをメンバーに疑われたハンターは最後はボコボコに殴られ、命からがら逃げ出すことになる。その時のボコボコにされた青タン顔の自分の顔をセルポートレイトに残しておくのもハンターらしいのだが(注3)。そこで書く内容を修正したり、もしくは出版を見合わせるのが普通であるが、ハンターはそれを当然のごとく堂々と出版した。その結果得たのが予想外ともいえるほどの賞賛。ベストセラーとなったこの本「The Lords of the Flat Earth」は、ハンターだけでなく、ヘルズ・エンジェルズそのものの悪名をさらに広げるにも役買ったソニー・バージャー達はこの本を嘘だらけの糞で、ハンターを腰抜け野郎と後にこき下ろしていたが。

この本の成功が、ハンターを「匹狼のアンダーグラウンドな酒飲み野郎の薬好きから、一流のジャーナリストへと変えた。そしてここで見られた文体が、後にアメリカでトム・ウルフをはじめとする新しいジャーナリズムの流れと称された「ニュージャーナリズム」の中核として認められることとなるわけだが、この文章のスタイルこそ、狂乱の60年代がジャーナリズムの世界にもたらした革新的なものだったといえる。それはベトナム戦争による反戦運動の高まりや、人権運動、学生運動といつた大きなうねりの中で、あらゆるものが急激に進歩、発展した人間とカルチャーの化学実験のような、その時代に生まれたいくつもの突然変異のつだった。音楽でブルースベースのロックをわずかに数年の間に異次元の宇宙

音楽にまで昇華させたジミ・ヘンドリックスと同じようなことを、ハンターはジャーナリズムの世界で成し遂げた。それは、ジミほどおおびらに巨大なインパクトを世界に与えた訳ではないかもしれないが、社会不適合者であり、いくつもの職業を転々としてきた、孤独なアウトサイダージャーナリストが作り上げた文章のスタイルは、時間をかけて全世界の似たようなジャーナリスト志向の反抗的な若者に夢と希望を与えた。それはアウトサイダーであり続け、どこかに所属しなくても、自分の罵声を世界に向けて吠え続けることができるという希望だった。

一躍時代の注目を集め始めたハンターは、その後終の住み処となるコロラド州ウッディ・クリークに居を定めると、ドラッグの個人使用の合法化などを掲げて地元の保安官選挙に立候補する。スキンヘッドのこのイカれた候補者(注4)が当選することはなかったが、その様子をルボにした記事が「ローリングストーン」誌に掲載されると絶大な注目を集め、以後ハンターの人気作が継続的に同誌に掲載されるきっかけとなった。そしてここにおいてゴンゾジャーナリズム、つまり、イカれた一人称の主観バリバリのスタイルが確立されることになる。それが頂点を極めるのが、後にジョー・デップ、ベニチオ・デル・トロ主演で映画化されることになった「Fear and Loathing in Las Vegas」(原作邦題…ラスベガス71、邦画名…ラスベガスをやっつける)。もともと仕事仲間だったメキシコ系ジャーナリスト殺害事件のルボを書く予定だったハンターが、情報元である弁護士のアスカ・アコスタと絡み、よりリラックスできる環境である「ラスベガス」に向かったことがこの傑作の発端となる。ちよつとラスベガスで行われるオフロードレースの写真キャプションを書くという簡単な仕事の依頼を受けたハンターは、その機会をうまく利用した。商業的で物質的なアメリカの象徴であるラスベガスにおいて、死につつあった60年代のカウンターカルチャー、ヒッピームーブメントを追悼するように、二人は酒にコカイン、マリファナにLSD、ありとあ

“GONZO” Hunter S. Thompson



注1：ヘルズ・エンジェルズ、オクラホダ支部のグループショット。60年代を駆け抜けた彼らオリジナルのメンバーのほとんどはバイク事故、ドラッグのオーバードーズ、殺人事件などで長生きすることはなかったが、狂乱の時代のアイコンとしてカルト的な知名度を誇っている © 2006 The Estate of Hunter S. Thompson / The Gonzo Trust / courtesy of ammobooks.com and M+B



注2：ソニー・バージャー(写真中央)、通称「チーフ」(酋長)。ヘルズ・エンジェルズのオクラホダ支部のヘッドにして、すべての支部の実質的な指導者の立場にあった伝説の男。軍隊時代に得たシステムをアウトロー社会に持ち込み独自のカルチャーを作り上げた。70〜80年代の大半を刑務所で過ごす。現在は故郷オクラホダを離れアリゾナ州に移住、ケイブ・クリーク支部に所属している © 2006 The Estate of Hunter S. Thompson / The Gonzo Trust / courtesy of ammobooks.com and M+B



注3：バーでエンジェルズにボコボコにされたハンターは、メンバーの一人であるタイニーの助けで命からがらそこから逃げ出すと、それから二度と彼らの元へ戻ることはなかった © 2006 The Estate of Hunter S. Thompson / The Gonzo Trust / courtesy of ammobooks.com and M+B



注4：麻薬の個人使用の合法化、山の景観を妨げる建築物の建設禁止、アスベンの街を「Fat City」に変更するなどの公約を掲げコロラド州ヒトキン郡の保安官に立候補した当時のポートレイト。ガチガチの共和党员である五分刈りの対立候補が、ハンターを長髪のヒッピー呼ばわりすると速攻で頭を剃り上げた © 2007 David Hiser / courtesy www.ammobooks.com



Hunter S. Thompson 『GONZO』 (AMMO Books)

昨年12月に刊行されたハンター・S・トンプソンの集大成ともいえる作品集。彼の考えたジャーナリズムから、写真、生原稿など、全240ページにわたって構成。作品集はハードケースに収められ、さらにセルフポートレイトのプリント付きという世界限定3000部の豪華版。写真集の出版社であるLAのAMMO Booksのウェブサイトでは、日本への郵送料を特別価格で直接購入可能。 www.ammobooks.com





ビッグ・サーの崖上にて、タイプライターで原稿を書くハンター。
最高の気候とロケーションの中で仕事する姿は、まさに百花の魁
©2006 The Estate of Hunter S. Thompson /
The Gonzo Trust / courtesy of ammobooks.com and M+B

らゆるドラッグをしこたま食い、もうあるはずのないアメリカン・ドリームを求めてラスベガスの街をゲロを吐きながら放浪する。このハンターのメチャクチャな旅は、誇張され、引き伸ばされ、現実と虚構を織り交ぜながら、時代の節目の空気を巧みに捉えた。ここにおいてゴンゾージャーナリズムは完成をみた。

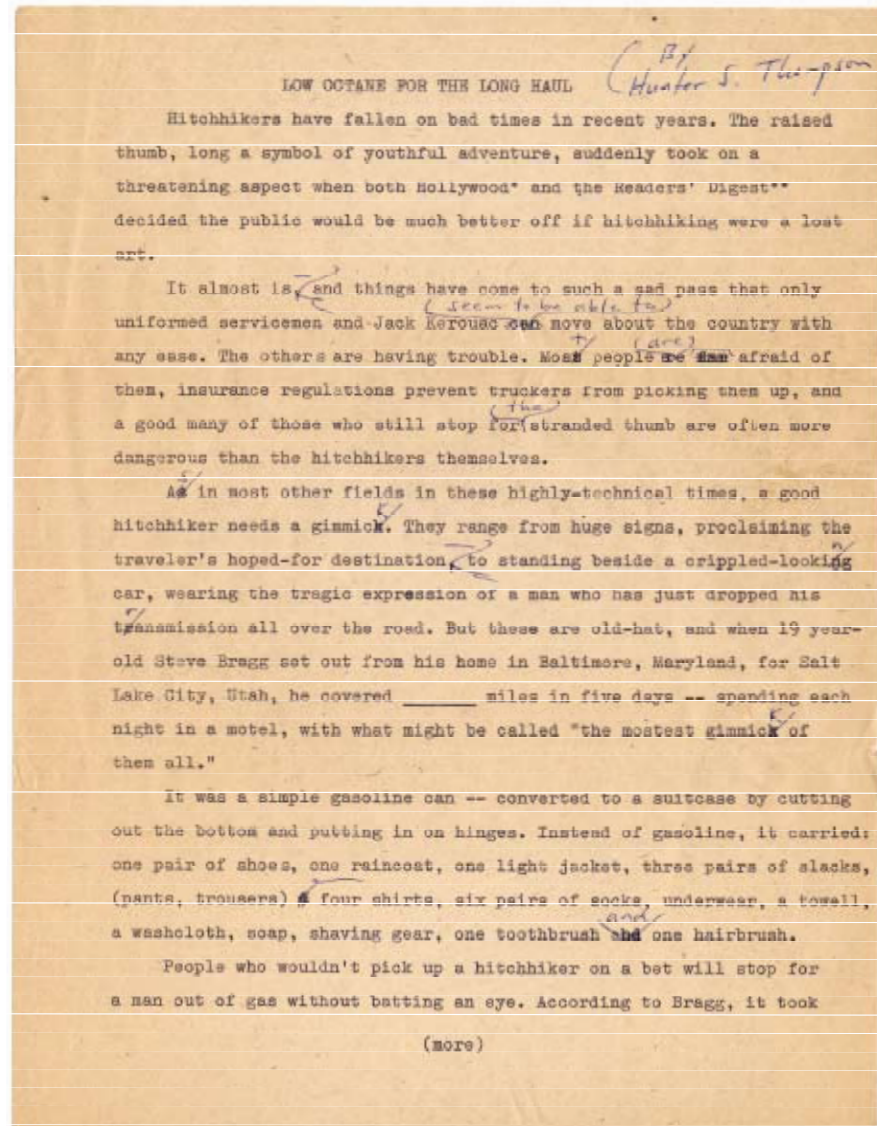
頭を撃ち抜きこの世を去った、アウトサイダーとしての人生

ハンターはその後も自分のスタイルを変えずに、毒を吐き続けた。ニクソンの大統領選のルポは実際に選挙活動を追ったが、1992年の大統領選ではケーブルTVの番組だけを見て選挙を追っかけるという、ナンシー関はりの手法でルポも書いている。そして歳を重ね、やがて数々の病気と薬物療法の結果、自分が自分らしくいられないと悟った時、ハンターはかつて自身がルポを書いたヘミングウェイと同じように、ショットガンを持ち自らの命を絶つ道を選んだ。もつとも、ただでは死なないのがハンター。最愛の妻であるアンタが外出中にかけた電話中に突然引き金をひいた。愛用のタイプライターの前に腰掛けながら頭を撃ち抜いたハンターが最後にタイプライターは「Gonzo」(カウセラー)だった。家族が遺書と認めた最後の文章は、死の4日前にアンタに送られた「フットボールシーズン」は終わった」という手紙だった。「もう試合もない。爆弾も、散歩も。お楽しみも。水泳も。67.50から17年経ってる。俺が生きたいと思つてた、必要だと思つてた歳より17年も余計だ。つまらん。いつも文句をたれてる。面白くない。誰にとつても。67. 欲張りになつてんだ。年相応に振る舞え。落ち着け。こいつに痛みは伴わない」

意味だ。集団、大多数の人間の集まり、ひいては規則に縛られた社会の枠の外側にいる人間。けつして取り込まれず、同化することはない。ハンターはゴンゾージャーナリストとして徹底的の中に入り込み、あらゆる細部まで記録した。ストリップ劇場のルポをする時にハンターがしたことといえば、ごく当たり前のようにそのマネージャーのように働くことだった。そこまで近づき、対象そのものになりながらも決して取り込まれることがなかった。世界最悪のアウトロー集団として知られるヘルズ・エンジェルズはアウトサイダーの最たるもの。だが、そのアウトローたちも集団として独自のルールを持つ。そこでもハンターは取り込まれることがなかった。あくまでアウトサイダーとしてあらゆる線の外側に立ち続けた。その立ち位置、その視点こそが、主観バリバリで書くというゴンゾーのスタイルにある種、究極の客観性を与えたといえる。

そうしたハンターのスタイルを体現するのが今ここに掲載している写真であり、そのすべてが収められたのが「GONZO」である。ルポする時と同じ立ち位置で撮った写真の数々。今までまとまらなかった形で見ることでできなかった写真が、こうして死後に出てくるというのもまたハンターらしい。写真を使って大々的に自分を売る気などさらさらなかったのだろう。その場の雰囲気をもつるために撮っただけの写真。ハンターはタイプライターという武器で言葉に変換できたのだから。ただ今こうして写真を見るとハンターがいかに取材対象と近い距離にいたのかということが改めてわかる。そして、写真の一枚一枚がハンターの文章を語りかけてくる。希代のアウトサイダー、ハンター・S・トンプソン。盟友である弁護士、オスカー・アコスタの著作のためにハンターが寄せた序文を最後に紹介する。それ以上、彼自身を表す言葉など他には存在しないのだから。

「ヤツが行くぜ、神が作り得た真の試作品。大量生産にやありえない強烈な突然変異。生きるには変わり過ぎ、死ぬには珍重過ぎる」



「LOW OCTANE FOR THE LONG HAUL」
〔低オクタンで長距離移動〕

「ヒッチハイカーたちは最近憂き目を見ている。ハリウッドやリーダーズ・ダイジェストがヒッチハイクは過去の遺物であり、ないほうが社会にとってまじだと断じた途端、若き日の冒険を象徴する「立てた親指」は、存亡の危機に立たされることになった。

悲しいことに、現在この国を我がもの顔で歩けるのは、制服を着たお役人がジャック・ケルアックくらのものだ。他にとってはそう簡単にはいかない。たいていの人間はヒッチハイカーというものを恐れ、保険の約款は、トラック野郎にやたらめったら車に人を乗せてはいけないと主張する。大体、今でも親指を立てたら止まってくれる車の運転手たちとさたら、ヒッチハイカー自身よりもよほど危険な奴らときている。

このハイテク時代のご多分に漏れず、このご世世に良いヒッチハイカーになるには、ギミック(ワザ)が要求される。大きな標識の近くで、ボンコン車の横に立ち、道中で変速機がバラバラに分解しちゃった。悲劇的な男の表情を装いつつ、ドライバーが気に入りそうな行き先を告げる。が、もはやこれも時代遅れだ。19歳のステイヴ・ブラッグは、故郷のメリーランド州ボルチモアからユタ州ソルトレイクシティまでを、わずか5日間で旅した。「ギミック中のギミック」とも呼べるような技を使い、ヤツは旅中のすべての夜をモーテルで過ごしたのだ。

その技とはどこにでもあるガソリン缶を、底を切り取り蝶番を取り付け、スーツケースへと改造したものだった。ガソリンの代わり詰めたのは：靴1足、レインコート、薄手のジャケット1着、スポン3本、シャツ4枚、靴下6足、下着、タオル一枚、フキン1枚、石鹸、ひげ剃り道具一式、歯ブラシ、ヘアブラシ。

ヒッチハイカーがどんなに頼みこんだところで乗せやしないドライバー達も、ガス欠の男には打ちひしがれた表情をせずとも車を停めるのだ。ブラッグによれば……」(続く)

ハンターが実際にタイプライターで執筆した生原稿
©2007 The Estate of Hunter S. Thompson /
The Gonzo Trust / courtesy of ammobooks.com